理科教師日記

のらねこ学会の夏休み

村田　憲治（岐阜県立加納高等学校）

『のらねこの挑戦』ついに出版！

7月中旬，定例の夏休み前三者懇談で疲れ切った身体を引きずって家にたどり着いたとき，郵便ポストに書籍小包が届いているのを見つけた。差出人は新生出版。

あわてて家に駆け上がり，包みを破ると，かわいいネコのイラストの表紙の本が出てきた。

周囲から「お前ら，本当に作ってるのか？」，「まぼろしの本になるんじゃないのか？」などという温かい（？）励ましの言葉を頂戴した『のらねこの挑戦～物理を楽しむ教師たちの作った本～』が，ついに刷り上がったのだ。

サークルでこの本作りを始めてから，3年かかった。岐阜物理サークルが渾身の力を込めた一冊だ。

目次から内容をひろってみよう。

「光通信物語」「僕たちの“のらねこ”宣言」「あなたも数学の授業で楽しい実験をしませんか？」「物理サークルに何でゾウリムシ？」「何でもまねして作ってみよう」「“超能力”・大道芸と勉強しない症候群」「波の伝わる速さから入る波動分野授業再構成の視点」「原子の国へのアプローチ」「そして僕たちは“旅芸人”になる」「のらねこの少数派宣言」「エネルギーの視点から物理を横断しよう」「LHRはおいしい科学実験&たのしい手作り工作を！」「“のらねこ”物理サークル」そして「陽だまり」と名づけられた憩いのコーナー（新しい実験やもの作り，小咄まである！）等々。

サークルのメンバーそれぞれが，いま一番

書きたいことを思いきって書く，オムニバス方式。「のらねこ学会」にふさわしいやり方だ。

知的冒険心に富む物理論文，サークル論，教育論，文化論，運動論，等々それぞれが勝手なことを書いているようで，全体を通してひとつのトーンがある。

僕たちがサークルに集うのは，砂を噛むような学校の日常の中でもなんとか元気でいたいと思うからだ。サークル例会で，本作りの過程で，僕たちは互いに励まされ，少しだけ元気を取り戻す。僕たちは自然の面白さ，奥深さの前で，〈学び〉の主体（＝当事者）としての自分を再発見したのだ。

そして地域のお母さんたちと科学広場をつくり，子どもたちと科学を楽しみながら，僕たちは気がついた。

僕たちのような平凡な教師にだって，科学と教育，そして文化に関わって何かを創造していくことができるかもしれない。さらに，ひょっとしたら〈教え／学び〉の二項対立の図式を解体し，教室を〈学びの共同体〉として再構築することだってできるかもしれない。

これは〈挑戦〉に値することだ。この本が全国の仲間へのエールになればいいと切に願う。

科教協大会ナイターは僕たちの元気の素だ

夏の科教協全国研究大会（大阪大会）に，今年は６人で参加した（サークルの最も古いメンバー，小川，長野，石川の３氏はアメリカのＡＡＰＴの集会に参加のため不在）。

科教協大会の一番の楽しみはナイターだ。といっても６人の順番と演題（？）だけ決めて，あとは出たとこ勝負。

トップバッターは加藤さん。元落研の彼の軽妙なおしゃべりが，ナイターに来てくれた人たちの心を一発でつかむ。焼酎の空きビンに水を入れ，ビンを微妙に傾けながらスプーンで叩くと，きれいな音階が出せる。彼はベートーベンの『歓喜の歌』を器用に演奏した。会場は明るい笑いと拍手に包まれる。

松尾さんが職人芸的実験装置を紹介しながら，「初めはマネなんです。でも自分で実際に作ってみるとね，マネじゃ終わらないんですね」とほほ笑む。

五島さんの「秘伝！ゾウリムシ培養法」，小野さんの身体を張った「人バラ（？）」，今井さんの「ビーチボールの宇宙遊泳」等々，脈絡なく（？）それぞれが一番〈面白い〉と思っていることを紹介しまくる。これが岐阜物理サークルのスタイルだ。ナイターの２時間はあっという間に過ぎる。

ナイターが終わっても，部屋のあちこちで人の輪ができて，それぞれの話は尽きない。これがまたいい。こういうコミュニケーションのなかでこそ，僕たちは励まされるのだ。

「ナイター速報」用の感想用紙を今井さんが若い女性から直接受け取った。ナイター後も残って，懸命に『皿回し』の練習をしてた彼女だ。

「初任研で疲れていましたが，このナイタ

「のらねこの挑戦」「"超能力"・大道芸と勉強しない症候群」より

ーに出て，〈遊び〉の中に面白さがいっぱいつまっているのを見て，ちょっと元気になれました。自分でも簡単に作れたストローの笛はとっておいて，いろんな音の高さのものを作ってみようかな？（東京・名前不詳）」

今井さんは，「〈ちょっと〉ってとこがいいね。〈すごく〉なんていったらウソっぽいもんね」と言った。僕もそう思う。でも，その〈ちょっと元気〉がたぶんいま一番大切なのだ。

ナイターの打ち上げで入った安っぽい中華料理屋で，ビールを飲みながら松尾さんがにっこり笑ってこう言った。

「この歳になってもね，この大会に出かける前は子どもみたいにうきうきするんだよ」

ホントにそうだ。科教協大会は，僕たちの元気の素なのだ。

大分のお母さんたちと科学広場をつくる

3年前，ひょんなことから知り合った大分のお母さんたち（児童文学と科学読み物の会）に招かれて，いっしょに『親と子のわくわく科学広場』をつくってきた。夏休みも終わりに近い8月下旬のことだ。

科学広場前日の準備会の夜，懇親会での会員の方々との会話。

「のらねこの挑戦・いきいき物理，40冊取り寄せたんだけど，全部売れちゃった！」「えっ!?」（感激のあまり，言葉にならず）「『のらねこの挑戦』，面白いわあ。私，読み始めたら興奮して，夜眠れなくなっちゃったくらい」

そのお母さんの手にした本には沢山の付箋が付けられ，線が引かれていた。（さすが『児童文学と科学読み物の会』だ。感心することしきり）

「科学は文化なんだと捉えるって，当然のことのようだけどハッとしましたよ。私たちの会や親子劇場の活動とあの本に書かれていることがピタッと一致して……」

うれしかった。こんなに読んでくださるなんて……。

長野さんが感慨深げに，でも明るい調子でこう言った。

「あのね，実はこの本を出版するにあたって，著名な人に推薦文を書いてもらおうと思って，ちょっと画策したんですよ。結局誰か

らも推薦をもらえませんでしたけどね。ははは。でもね，今では〈それでよかった〉と思ってます。

それでね，もし，この本の第2刷が出るようなことがあったら，そのときには本の帯を作って，そこにこの会のお母さんたちで推薦文を書いてもらえないでしょうか。著名人じゃなくて，まったく無名な（失礼！）主婦の方に『この本をお勧めします』って書いてもらえたら，僕たちにとってこんなに誇らしいことはありません」

サークルメンバーはみな大きくうなづき，大分のお母さんたちは，「もちろん，喜んで書くわ！」と微笑んだ。

大分での「親と子のわくわく科学広場」

大分での科学広場は，大成功だった。岐阜物理サークルが関わる科学広場では，僕たちは「できる限り裏方に徹する」という方針を持っている。僕たちは〈実験名人〉ではない。広場を運営する主体は地域のお母さんやお父さんだ。そのために，いつも事前にそのお母さんやお父さんと一緒にきちんと研修会（まあ，ミニ科学広場みたいなものだ）をやる。

こうして〈種蒔き〉をやれば，僕たちがいなくたって，彼女たちは今後も自前で科学広場を作っていけるようになるはずだからだ。(実際にはなかなか時間がかかるようだが)

広場に来てくれた子どもたちは，みないい顔をして帰っていった。それを見送りながら水道で実験器具を洗っていたら後ろから親子連れに声をかけられた。

「今日はホントに楽しかったです。ありがとうございました」

お母さんの眩しいほどの笑顔。

「こちらこそ，ありがとうございました」

小学1年生くらいの女の子が，ニッコリ笑ってちっちゃな手を振ってくれた。

疲れがいっぺんで吹っ飛んだ。だから科学広場はやめられない。